クリスマス特集
闇の中に輝く光

幼稚園 Kindergarten

どんな時も見守ってくださる神様

年長組保護者　真山 真理

日々の生活の中、皆でするお祈り

毎年幼稚園ではアドヴェントからの毎週の礼拝、クリスマス礼拝でクリスマスをお祝いしています。 今年はクリスマスをどのように迎えられるのか、自粛期間中に想像することもできませんでした。いつまで休園が続くのか、見通しがたたないことはこんなにも不安になるのだと改めて感じました。

自宅ですごす日々の中、娘の楽しみは幼稚園から送って頂くメールです。幼稚園の先生が作って下さるお話を楽しみ、最後には手を組み、目を閉じてお祈りしていました。その時間は一日の中で一番安心できる時です。

一度休園中に娘と外から幼稚園を見に行きました。園までの道のり、3か月ぶりに見る景色がかわらずそこにあることに感激したのを覚えています。

どんなときにもお祈りできる子ども達と共に、いつも私達を見守って下さる神様に感謝し、今年もイエス様のお誕生をお祝いしたいと思います。

クリスマスおめでとうございます。

私の光

幼稚園教諭　藤田 晨平

緊急事態宣言が出て、私が通う教会では礼拝で集うことを一時やめ、オンラインの礼拝を始めました。ニュースを見れば、今までも確かにあった社会の分断がより明らかになっていくように感じました。つながること、線が引かれていくこと。このような世の中にあって、自分はどこに立つのか、確認させられる時を過ごしました。

イエスの旅路は、社会で小さくされたものに線を跨(また)いで出会いにいくものであり、その先に十字架と復活がありました。その始まりとしてクリスマスの出来事があります。待ち望まれた救世主は、誰も予想しなかった、とても小さな存在としてやってきました。小さくとも、大きな光でした。神さまは小さな私のことをも照らし、出会いに来てくださった。そのことを喜ぶクリスマスを、幼稚園の子どもたちと共に迎えたいと思っています。

初等部 Elementary School

神様の存在

初等部6年　森田 涼香

「闇の中に輝く光」というテーマに合うなと思った聖句があります。それは「光の子どもらしく歩みなさい」という聖句です。それは闇の中であっても光の子として歩みなさい、と言っているようで、私はこの聖句が一番好きです。

例えば悲しい事があったとしても、光の子らしく歩めばいいとポジティブに思えます。それに今はコロナウイルスがはやっていて、暗闇の中を歩んでいるように感じられます。けれどもこの聖句を読むと、どんな時でも光の子として歩もう、と思えます。この聖句があったから物事を前向きに考えられます。ありがとうという気持ちをもって、今年のイエス様の誕生日をお祝いしようと思います。

イエス様の誕生日を心からお祝いします。それはイエス様が支えて下さらなければ、今、光の子らしく私は歩めていないからです。神様の存在に今年ちゃんと気づくことができました。

体育発表会

"暗闇"で気付いたこと

初等部教諭　吉野 かおり

爆撃音が響き、窓の外では土煙が上がる。夜はもちろん、日中も家の外に出ることは危険。家の中にいても、敵兵に見つれば生活どころか命が危うい――過去のどこか、現在でも地球のどこかでそんな生活を送る人がいる。

4月に始まったオンライン学習は当初、不慣れも手伝って20分の教材作成に十数時間を要した。課題の返信がないと最悪の状況を想像し、平静でいられない一方、質問や相談をしてくる子もいた。非日常の中で教材を配信し続けることが私の役と思い、一日中パソコンの前で過ごした。家の中で息を潜め、焦りと不安に苛まれている時に思い浮かんだのは、アンネ(『アンネの日記』)や聖地訪問中に知り合った難民ニダル、圧政や紛争に苦しむ人々のこと。戦争と感染症は全く違うけれど、奪われた移動の自由、明日が見えない不安・恐怖は重なるのではないか。そんなことを思った。

「暗闇に住む民は大きな光を見、死の陰の地に住む者に光が射し込んだ。」(マタイ4:16)

今も世界中にいる「アンネ」や紛争下で苦しむ人々を思い、光の源である主の救いを祈り求めたい。

中等部 Junior High School

困っている方々の支えに

中等部3年　天野 康太

今年の中等部のクリスマス礼拝は、新型コロナウイルス感染症の対策のため大幅に縮小することになってしまいました。クリスマス礼拝のメインであったページェントはなくなり、ハンドベルや聖歌隊も活動を縮小するそうです。僕の友達にもクリスマス礼拝を楽しみにしていた人がたくさんいました。クリスマス礼拝の縮小が決まった時、僕はマタイによる福音書の7章の「求めなさい」という聖書箇所を思い出しました。この内容を簡単にまとめると「神様に求めれば、与えられる。だから人にしてもらいたいことを自分もする」となります。現在ほとんどの人が、この感染症が早くなくなってほしいと神様に願っているのではないでしょうか。僕もその一人です。このような状況なので、僕はこの聖句のように、人に与えられるような人間になることがとても重要であると思いました。現在は感染症対策として、今までとは違う生活をしなければならないと思います。少しでも困っている方々への支えになれるように神様に祈りながら今年のクリスマスを迎えたいと思います。

オンライン礼拝

神様の励まし

中等部3年　町 諒花

今年1年を振り返ってみたとき、やはり一番に頭に浮かぶのは、コロナウイルスによる大きな影響だと思います。いつ、誰に命の危険が及ぶかわからない中で、見えないウイルスというものに怯えながら生活するのは、多くの人にとって息苦しい状況だったはずです。けれど、本当にそれだけだったでしょうか。私はそうは思いません。この1年で多くのことを考えさせられました。

今まで当たり前のように受けていた授業、何時間もかけていた部活動よりも、縮小された不自由な授業、短時間しかできない部活動の方が貴重に感じられる。それは何故かというと、コロナによって当たり前を私たちが失ったからだと思います。だから、学校に行けることも、部活ができること自体もありがたいと思えます。

けれど、人の命が奪われてからはじめて、日常のありがたみに気づくのでは、もう遅いはずです。何も起こらなくても、その日常が当たり前のような時でも、常に心を向けて幸せを感じられる人になりたいです。また、そんな人が少しでも多くなったらいいなとも思います。そのことに気づけたのは、見えないところから神様が私を励まし、支えてくださっていたからではないかと感じました。

コロナ禍での無人の礼拝堂

高等部 Senior High School

困難の中でもつながりを大切に

高等部3年　中村 美尋

フィリピン訪問先にて

グローバルウィーク
(フィリピンの子どもたちにカードを送る)

私は一昨年度のフィリピン訪問プログラムに参加し、多くの子ども達と交流してきました。環境には恵まれなくても強く明るく生きる姿は今でも私の心の支えになっています。そして、昨年度もプログラムに参加することになり、子ども達との再会を楽しみにしていましたが、その願いが叶えられることはありませんでした。しかし、自粛期間が続く中で自分たちには何ができるのかを模索し、6月にはオンラインででのグローバルウィークを開催することができました。渡航は叶わなかったものの、フィリピンの子ども達について高等部生に伝えることのできた貴重な時間になりました。

10月には支援している子ども達にクリスマスカードを書く企画を行うなど、私たちなりの活動を行ってきました。世界中が困難に立ち向かう中でもフィリピンとの繋がりは続いています。そして、クリスマスを通じて私たち高等部生とフィリピンの子ども達に大きな喜びが与えられたことを感謝したいと思います。

災いを通して

高等部聖書科教諭　中西 理恵

今年はコロナ禍により多くのことを断念せざるを得ませんでした。特に3年生は学校行事や部活動の大会が中止になり、活動の締め括りと気持ちの区切りをどこでつけるのか悩み苦しんだことと思います。しかし一方で、この状況でできることは何だろうかと真剣に考え、乗り越えようとする一人一人の力強さをも目の当たりにしました。

中村さんが報告してくれたフィリピンとの繋がりもその一つです。それらの姿に励まされながら、私は聖書の言葉を思い出しました。すべての人を照らすためにお生まれになった御子イエス・キリストは、目の見えない人を見つめながら、「神の業がこの人に現れるため」(ヨハネ9:2)だとおっしゃいました。

災いとしか思えない事柄をも通して、神は私たちに恵みを与えようといつも働きかけてくださいます。新型ウイルスに翻弄され、暗中模索する私たちの傍らに、いつも真の光がおられ、未来へ導いてくださることに信頼したいと思います。

女子短期大学 Women's Junior College

イン・ザ・ロングラン

専攻科現代教養専攻1年
河野 未奈

初めての冬が訪れる。

未知のウイルスにより、これまでとは全く異なった生活を強いられた2020年。手探りの生活を気付けば1年近く続けていたことになる。アルバイトは禁じられ、友人と出掛ける約束も宙に浮き、大学にすら通えない。毎日膨大な量の課題に追われていたからか、2020年はなんだかあっという間だったように思う。

今年の4月と5月、私はほとんどの日々を家で過ごした。昨年の自分からは考えられないスケジュールである。大学、アルバイト、友人と過ごす事で忙しかった2019年はまるで夢のよう。春の陽気が気持ち良い2か月間、私は時折愛犬と散歩に出掛けた。散歩なんてしばらくしていなかったからか、嬉しそうに歩く愛犬の姿はとても印象に残っている。

籠っていた2か月間を、私は無駄だったとは考えていない。決して「良かった」とは言わないが、愛犬の笑顔という小さな幸せに気付けただけでも、大きな意味があったと感じる。

「あんな時もあったなぁ」と話せる日がいつかきっとやって来る。今年のクリスマスのギフトは、「長い目で見る力」をお願いしようと思う。

あらためて、真摯な祈りを

現代教養学科人間社会専攻 准教授　武田 美亜

今年はとにかくCOVID-19に振り回された。短大の授業は前期も後期も一部を除いて原則オンラインでの開講となった。私にとっては青山キャンパスで短大生と過ごす最後の年だったのだが、そんなことを噛み締める余裕もなく研究室を引き払うことになりそうだ。

感染症そのものも厄介だが、日本赤十字社が「第2・第3の"感染症"」と呼ぶ、不安などの精神的ダメージと、感染者や医療従事者に対する嫌悪や差別といった社会的問題が、ウイルス以上にじりじりと私たちの心を蝕む。

メールやオンライン会議で交わす挨拶では、「一刻も早く事態が収束することを祈ります」「次は対面でお会いできることを祈ります」など、何かしら「祈る」文言をつけることが増えた。実際、あとはもう祈るしかないと途方に暮れることもたびたびあったのだが、それにしても安易に「祈る」と言いすぎたかもしれない。

クリスマスにあたり、あらためて「祈る」という行為を丁寧にしてみようと思う。

オンラインコンサート後に

グロリアスクワイア練習風景

大学 University

不思議なクリスマス

経営学部4年　安田 裕

新約聖書の中に このような言葉があります。「「昇った」というのですから、低い所、地上に降りておられたのではないでしょうか」(エフェソ4:9)。

これはイエス・キリストが神でありながら同時に人間でもあるということを説明する言葉だと思います。キリスト教の不思議さの根源にあるのは、イエス・キリストが一体何者なのかということであるとずっと感じてきました。よく考えればクリスマスというのはイエス・キリストの誕生を祝う行事なので、実際にイエス・キリストが自分と同じようにこの世界にいたのだということはわかっていたはずですが、キリスト教に関心がなかった頃はイエス・キリストは単に神であるという認識しか持っていませんでした。神が地上に降りて、人間と同じように食べたり寝たりする姿を想像すると、とても面白いなと感じます。クリスマスは、そのようなイエス・キリストの不思議さをあらためて覚えるとても大切な行事だなと考えています。

コロナ禍で過ごす今の心境

地球社会共生学部教授　岩田 伸人

今年の3月までは朝4時に起きる事など、まず無かったのが、今はリモート講義の準備がない毎週末、早朝4時には起きて近くの公園を軽くウオーキングなどして、4時半から原稿を書いたり研究資料を読み込んだりするスタイルに変わりました。ただそれは外面的な日常生活パターンの変化であって、心の中の変化はこれとは別です。

コロナ前は、研究者仲間と会って議論したり、学生と実際に会ったことから自分が受けた刺激が原因となって、じゃあこれを調べようとか、明日はこれを話そうといったように、他者と自分の因果関係がありました。ところがコロナ以降は、そのような他者との刺激的な関わりが薄れています。その代わり、まず自分で考えたことや疑問に思ったことが原因となって、じゃあ今日はこれを読もうとか、これを原稿にしようとか、要するに思考パターンが自己完結型になることが増えました。

さて今朝は、大学教員33年間に思いを巡らして、自分が初心に決めたことを未だやり遂げていないこと、それにはあと数年間かかることに少しの後悔と希望を見出したところです。そう言えば、自分は昔から、現実と理想のギャップがあったなあという実感が湧いています。

オンライン点火祭のためのハンドベルクワイア・聖歌隊による賛美(初等部、女子短大、大学)

CHRISTIAN ACTIVITIES CENTER NEWS
宗教センターだより(予定)

高等部より

クリスマス礼拝
12/19 土

卒業礼拝
2021年3/8 月

女子短大より

クリスマス礼拝
12/9 水 オンライン礼拝

卒業礼拝
2021年3/15 月

大学より

クリスマス礼拝
12/22 火 オンライン礼拝

スプリングカレッジ・フォー・リーダーシップ
2021年2/4 木-5 金

卒業礼拝
3/27 土

本部より

クリスマス・ツリー点火祭 ～降誕を待ち望む礼拝～
11/27 金 オンライン礼拝

全学院教職員新年礼拝
2021年1/8 金

＊各部の予定は変更となる場合があります。

CHRISTIAN ACTIVITIES CENTER NEWS
宗教センターだより(予定)

幼稚園より

アドヴェント礼拝
11/26木 年少組親子
27金 年中組年長組
12/ 3木 年少組親子
4金 年中組年長組
10木 年少組親子(ベージェント)
11木 年中組年長組

クリスマス礼拝
12/15火 年長組親子(ベージェント)
16水 年少組親子
16水 年中組親子

卒園礼拝(年長児)
2021年3/ 5金

終業礼拝
3/11木

卒園式
3/12金

初等部より

クリスマス礼拝
12/19土

卒業礼拝
2021年3/ 3水

6年生を送る礼拝
3/ 8月

中等部より

クリスマス礼拝
12/16水

伝道週間
2021年1/18月-22金

卒業礼拝
3/16火

*各部の予定は変更となる場合があります。

表紙写真
2019年相模原キャンパス点火祭後の風景

クリスマス メッセージ

闇の中に輝く光

イザヤ書 9章 1～6節

大学宗教主任 髙砂 民宣

未曽有の試練と危機とに直面することになった2020年も、残すところあとわずかとなりました。昨年の今頃、新しい年にこのような世界規模の大惨事が起こるとは、いったい誰が想像し得たでしょうか。私たちは今、深い闇に閉ざされたような混迷の状態の中で喘ぎ苦しんでいます。

青山学院大学では、今年は3月の卒業式も、4月の入学式も中止となりました。特に4月から大学生となった1年生の中には、新しい友人を思うように得ることができず、部活やサークルに入るのも困難な状況となり、「高校4年生」のような気持ちで毎日を過ごしている人が多いと伺っています。また、異例の状況下のために就職活動が思うように行かず、悲しみと怒りを覚えている大学4年生がいます。このように新型コロナウイルスの影響は、様々な所に及んでいます。

感染拡大を防ぐために、大学では5月1日から授業も礼拝もオンラインで行われるようになりました。そして前期の終了と共に、教員と学生の両者を対象に、授業に関するアンケートが実施されました。

教員を対象としたアンケートでは、「授業動画を繰り返し視聴できるので、学生たちの授業理解度が高くなったと感じる」、「対面では語り尽くせない、知識体系の深くまで理解した学生が少なからずいた」、「シャイな学生も、オンラインだと質問しやすいのか、例年よりも質問が多かった」といったプラスの回答があったのに対し、「通常の授業準備の倍以上時間が掛かる」、「学生たちの反応が分からない」といった回答も見られました。

また、学生を対象としたアンケートでは、「通学時間が無くなったことにより、時間を有効活用できる」、「青山キャンパスに所属する学部生でも、相模原キャンパスで開講される講義を受講することができた」、「自分の命、家族や周囲の大切な人々の命を考えると、オンライン授業が望ましい」といった好意的な意見がある一方、特に1年生の中に「友人が作れない」、「先輩からアドバイスをもらえない」といった意見がありました。また、「課題の量が多くて目が疲れる」、「ひたすらパソコンと向き合う毎日で、ストレスを感じる」、「精神的な負担が大きい」、「睡眠時間が足りない」といった否定的な意見もありました。アンケートを通して、教員と学生の両者ともに賛否両論様々な意見があることが伺えます。教職員も学生も、暗中模索のような状態で、ようやくここまでたどり着くことができたという思いを抱いています。

そのような状況にあって、今年もクリスマスが近づいてきました。今年はいつも以上に、旧約聖書に記された預言者イザヤの言葉が身に沁みます。「闇の中を歩む民は、大いなる光を見／死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた」。これは紀元前700年頃、イザヤという預言者によって語られた言葉です。アッシリアという大国によって侵略を受け、民族としてのアイデンティティを失いかけていたイスラエルの民。まさに苦難と闇の中を歩んでいたイスラエルの民ですが、彼らは大いなる光を見ると、イザヤは預言したのです。そしてこの預言は、それから700年ほど後に、小さな「ひとりのみどりご」が誕生することによって現実の出来事となります。その「みどりご」とは、イエス・キリストを指しています。そしてこの約束は「万軍の主の熱意」、すなわち神ご自身の情熱によって実現すると、イザヤは力強く預言しています。

私たちも現在、コロナ禍にあって自由を抑圧されています。そうした状況に置かれているからこそ、今年のクリスマスは何か特別な響きをもって私たちに迫ってくる気がします。世に来てすべての人を照らす真の光であるイエス・キリスト。この御方の御降誕を、皆で心を一つにして待ち望み、お迎えしたいと願います。

青山学院の礎を築いた一人であるドーラ・スクーンメーカー宣教師は、恩師に宛てて書いた手紙の中で、女子小学校創設について、「この暗い世界に小さな光を灯す歩みを始めました」と記したそうです。真の光であるイエス・キリストを、本当の意味で頂いたスクーンメーカー宣教師ならではの言葉であると感銘を受けます。

夜空に輝く月は、太陽の光を反射することによって輝いています。私たちも真の光であるイエス・キリストを心の中にお迎えすることによって、その光を反射して輝く者になりたいと祈り願います。

まもなく始まる新しい年も、希望をもって力強く歩んで参りましょう。

あなたの悩みと疑問にお答えします!

大学宗教主任
藤原 淳賀

質　問

聖日に教会に行くことができないときにはどうしたらよいですか?

(大学経営学部2年生)

教会を訪問してみたい方

キリスト教に関心があるけれど、新型コロナウイルスのため、あるいはスケジュールの問題で、日曜日の礼拝に行くことができないということがあると思います。多くの教会では、礼拝をインターネット配信しています。それをご覧になるとよいでしょう。青山学院大学・短大オンライン礼拝も視聴することができます。

教会に所属するクリスチャンの方

教会を訪問してみたいというビジターの方々とは異なり、洗礼を受け教会に所属するクリスチャンの方々は、基本的に毎週日曜礼拝に出席することが期待されています。神を知り、神の栄光をあらわし、神を喜ぶことを人生の目的とする日本のプロテスタント教会は、日曜礼拝を非常に重んじてきました。最近では、礼拝を「死守する」から「厳守する」、「遵守する」と変わってきたように思います。しかし、日曜礼拝を「守る」という表現には、週の最初の日を神に捧げる、という思いが反映されています。教会へ行き始めの頃は「行けるとき、行きまーす!」でよいのですが、そのステージは、洗礼を受けるまでに卒業するものと考えられています。

しかし、礼拝の大切さを理解した上で、それでも日曜日に礼拝に出席できないことがあると思います。体調の故、どうしても動かせないスケジュールの故に、あるいは、行くべきだと思いながらも心が重く、奉仕が重く、礼拝へ行くことができないということもあるのではないかと思います。

そういうとき、どうしたらよいのでしょうか?

休んでください。そして神の近くに憩う時間を持って下さい。

最も大切なことは、あなたが神の内におり、神をお愛しすることです。そして隣人を自分のように愛することです。もし教会に来ない人を審き、義務感から教会に行き奉仕をしているのなら、それは神が願っておられることではありません。ペテロが、イエス様のことを知らないと3度言った後、イエス様が語られたのは、反省を求める言葉ではなく、あなたは私を愛しますか、という問いでした。

聖日に教会に行かれないとき、神と過ごす時間を持って下さい。可能ならインターネットの礼拝を視聴されたらよいでしょう。

CHRISTIAN **BOOKS & CDs**　シリーズ・キリスト教関連メディア紹介

『クリスマスの約束 ── ルカ福音書による37の黙想』 大嶋 重徳著　教文館　2019

初等部教諭
馬越 嶺

「クリスマスを迎える時期というのは、一年の終わりでもあります。過ぎた一年を振り返ると、心が重く、暗く、悲しくなるというお方もおられるでしょう。(中略)しかしこの暗く、重く、悲しい出来事の中にも、神がおられて、神が自分の人生に計画を持っておられることに気づくことができるならば、その悲しみの出来事は、神からの深い慰めと大きな喜びとなります。」(「はじめに」より)

コロナ禍で迎えるクリスマスとなりました。昨年の今頃は、2020年がこのような年になろうとは想像もしていませんでした。誰にとっても、心が暗く沈むことの多い一年だったでしょう。しかしそうであればこそ、私たちの心を照らすクリスマスの光は、よりその輝きを増すのではないでしょうか。

本書は、「ルカ福音書による37の黙想」とあるように、待降節(アドベント)から1月6日の公現日(エピファニー)まで1日に1章ずつ、37日間読み進める「黙想」の書です。「黙想」は英語で「meditation」または「silent meditation」と言いますが、それは「黙って静かに思い巡らす時間」であり、「自分の人生に起こった出来事の意味を、神との対話の中で考える」(「はじめに」)時間のことです。

著者の大嶋重徳先生は、埼玉県川口市にある鳩ケ谷福音自由教会の牧師であり、昨年度までKGK(キリスト者学生会)の主事として20年間、大学生・ユース世代と関わりながら、御言葉を語り続けて来られた先生です。今年度から本学の教育人間科学部でも「礼拝学」の授業を担当されており、また以前には初等部や高等部の礼拝にも来られて、児童・生徒たちに向けて楽しく分かりやすくメッセージを届けてくださったこともあります。

放っておけば、12月は忙しさに流されて、あっという間に過ぎていきます。だからこそ本書を手に取り、ご自分の生活の中から少しだけ時間を取り分けて、「黙想」するクリスマス・シーズンを迎えてみてはいかがでしょうか。

WESLEY HALL NEWS

No.134 DECEMBER 2, 2020

闇の中を歩む者は、大いなる光を見
死の蔭の地に住む者の上に、光が輝いた。

イザヤ書 9章 1節

地の塩、世の光
The Salt of the Earth, The Light of the World
(聖書 マタイによる福音書　第5章 13～16節より)

シリーズ
祈り

闇は深まり、　夜明けは近し。
あけの明星、　輝くを見よ。
夜ごとに嘆き、　悲しむ者に、
よろこびを告ぐる、　朝は近し

讃美歌21・243番1節より

アドベントからクリスマスへ。それは、闇から光への旅路です。色々なことがあり、色々なことがなかった2020年。私たちを照らす光としてこの世に来られた主イエス・キリストのご降誕を祝うクリスマスが近づいてきます。嘆き悲しむ者に喜びを告げるクリスマスはすぐそこです。

(高等部宗教任　山元 克之)

編集後記

今回の編集に携わらせていただく中で、コロナ禍における各部の取り組み状況をより深く知ることができました。また、園児・児童・生徒・学生たちをはじめ、保護者や教員の心の内にある思いや葛藤が、ほんの一部ながらも共有されたものと思います。

恐れや不安の支配する深く大きな闇。その最中でお生まれになった神の御子が、私たち一人ひとりの頬を優しく照らしてくださることを信じつつ。

(高等部教諭　神田 信輔)

Wesley Hall News　第134号
2020年12月2日発行

発行　青山学院宗教センター　学院宗教部長　大島 力
東京都渋谷区渋谷4-4-25
TEL.03-3409-6537(ダイヤルイン)
(URL)http://www.aoyamagakuin.jp/rcenter/index.html
(E-mail)agcac@aoyamagakuin.jp
編集　ウェスレー・ホール・ニュース編集委員会
印刷　株式会社 萬全社